

第13回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール

特賞

小論文部門

将来の主権者を育てる金銭教育の展開

～行事を最大限活用した「コア学習」の先行的研究～

徳島県・阿南市立富岡小学校 教頭 島村 孝

知るぽると
www.shiruporuto.jp

© 金融広報中央委員会 2016

1. はじめに

近年、主権者教育という言葉をよく耳にすることになった。法律の改正で、平成28年度の参議院選挙において18歳からの参政権が認められたことが背景にある。主権者教育が重要視されてきているが、教育現場には十分に浸透していない。今回、金融教育の中でも主権者教育を行うことが可能ではないかと考え、行事を活用して行ってみたのが本研究である。

2015年9月4日付の金融広報中央委員会の次期学習指導要領改訂に向けた要望書には「2. 望ましい資質・能力」の項目で、「とりわけ重要な資質・能力として『複雑な状況に直面して課題を設定しつつ問題を解決する能力』『多様な他者と緊密なコミュニケーションを通じて協働する能力』『社会や生活を良くしようとする高い志』『これまでにない価値を生み出す創造力』などに重点が置かれていく方向とみられる」とされている。加えて、「3. 望ましい学校教育の在り方」では、「従来の教科を越えて社会や地域の課題を自分のこととして捉え主体的・協働的に考え、実践する態度・能力を育成していく教育を推進していくことが重要である」¹⁾と結ばれている。

前任校の山口小学校では、平成26年度に地元漁協の協力を得て、3・4年生が水を巡る学習とのコラボでワカメの養殖と販売を行ったが、その事業を発展させ、27年度には「続ける」「つなげる」「掘りさげる」の必然性に焦点を当てることとした。金銭教育に関わる行事を核（コア）とし、その実施を前提にあらゆる教科・領域を巻き込んだ取組を行い、それが将来の豊かな主権者へとつながる試行研究とすることで、児童の自己肯定感を高めようと考えた。

2. 先行的研究としての本研究の意図

- (1) 金銭に関わる行事を核とすることで、学習内容の重なりを生み、時間数の節減で担任の取り組みやすい金銭教育を行う。
- (2) 学習過程を透明化し、学びの質を BEFORE・AFTER で語れる内容とする。
- (3) 主権者教育の定義を「自分が投票権を得た時に、どんな政策に税金を支出する人を選ぶか」という観点で小学校段階の学びを深める。

3. 研究の仮説

健全な主権者となり得る社会的な知識や思考力・判断力・表現力などの公民的資質は自分たちが販売の当事者となった主体的な経験でのみ育つのではないか。

4. 仮説の根拠となる進め方

- (1) ワカメ養殖と販売を全学年に広げ、販売益の社会貢献も視野に入れ、異なる考え方を討議することで、消費者としての深い学びを得る。
- (2) 子どもたちが育てた、商品（ワカメ）の知識を豊かにし、接客時に商品説明（調理面・栄養面・養殖海域の環境の素晴らしさ等の解説）ができる能力を育成する。
- (3) 販売益を支出する際、少人数の弊害である一部の児童の意見が支配的となることを排除し、異年齢でも民主的な意思決定が行われるようにする。

5. 研究への手立て

- (1) 各学年数名～7名という児童数での表現力を磨くため、朝会の時間を使い、学級ごとに輪番制で発表をする機会を定例化した。
- (2) 従来の修学旅行では、近畿圏の文化財や遺跡を巡る1泊2日の日程であったが、翌春のワカメの販売時に6年生は、店長クラスの役割を担うことを想定し、西宮市にある「キッズニア甲子園」での体験を組み入れた。

6. コア学習の BEFORE・・・行事を機会ととらえ、それに正対するために（資料1）

(1) ラベルデザインを考える過程・・・全校が一丸となる。

前年度の販売では商品名が決められておらず、所属感を高めるためのブランドイメージの統一が急務であった。そのため各学年でネーミングの候補を持ち寄り、全校集会で投票した。偶然にも「山口ワカメ」と「絶品ワカメ」が同数だったため、二つを合体するという折衷案が生まれた。すぐに水産加工業者の利用する専門店で、前年度実績を上回る 2,000 袋のラベル印刷を発注した。

(2) 異学年集団での話し合い・・・売り上げをどうしたいかを事前に考える。

販売益が生まれた際に、「誰のために何を買う」という話し合いが円滑にできなければ、前年度と同じになってしまう。しかし、どうしても越えなければならない年齢の壁がある。発達段階を配慮しながら、思考や予想のタイムラグを吸収し、共に考えるための簡便な方法を考えた。①まず、学級内で前年度の販売実績と購入品目から、どのようなものを誰に対して支出することが必要かということ話し合わせた。②それを、全校集会で支出することでどんな効果（社会的な影響）があるかということまで考えた学級提案をする。③それを受けて提案内容の修正と再提案をするという展開である。

ただ、1年生に生活経験が乏しく建設的な質問をする力が未発達であるということは自明の理である。しかし、それでは社会経験が少ない 18 歳の若者には投票する意味がないということに等しい。そこで、全校集会において出された質問のうち児童らが即答できない内容については、持ち帰って答える方法をとった。各学年の販売益からの使い道の提案は次のとおりである。

学年	買いたいもの	そのわけや根拠
1年	花の種	学校や地域を花でいっぱいになりたい。
2年	本	古い本が多い図書室なので、新しい本をいっぱい読みたい。
3年	ブランコ	昼休みに順番待ちなしでいっぱい乗りたい。
4年	ベンチ	バスを待つ人にきれいなベンチを使ってもらいたい。
5年	校章旗	運動会で掲げる校章旗がないのを何とかしたい。
6年	遍路の杖立	四国を巡るお遍路さんに杖を使ってもらいたい。
全校	車いす	昨年に続き、市内のお年寄りに使ってもらいたい。

即答できなかったものも含め質問は、児童玄関に設置した各学年ごとのメールボックスに入れさせ、回答を後日伝えることとした。この中で4年生の目線は、人権を考える中で、過疎地から病院への便数の限られたバス待ちをしている高齢者に向けられ、6年生の気持ちは、総合的な学習の時間で取り組んでいる遍路道を歩く巡礼者へのお接待の充実に向けられた。学校生活の改善を願うものは、3年生のブランコである。短い休憩時間の中で遊びたらないとの不満から出発し、ボール遊びなどの集団遊びが児童数が少ないことで限定されることから、「毎日の順番待ちをなくしたい」という切実な気持ちと大きな夢がこめられていた。

討議で話題となったのはブランコであった。いくら販売が好調でも、高額な遊具を設置することは無理だろうという空気が生まれた。しかし、その提案をモノの価値を知らないと否定することは決して育ちにはつながらない。人はさまざまな経験を経て、価値や費用対効果、お金の力を知るのである。その後の1週間余り、他の学年からの質問を全員で考え、丁寧に返事をしたためメールボックスに入れる3年生の姿があった。

(3) カー・オブ・ザ・イヤー方式での集計・・・根拠を持って優先順位をつける。

集計は、最も死票の少ない方法とした。例年、自動車業界ではその年に発売された最も優れた車を選考委員が投票で選ぶ。それが、「カー・オブ・ザ・イヤー」である。その仕組みを意思決定の場面に全面的に導入した。まず、子どもたち全員に10点の持ち点を与え、最高点は5点までで三つ以上の学年の提案に割り振るというものである。もちろん、自分たちの提案は大事にしても、次がいいと思うものに何点を振り分けるかが学習である。当然、提案も熟を帯びたものになったが、各学年の提案からは、それぞれの学年の学習内容や展開が垣間見える。

ここまでの手順を経て、金銭教育への理解と意識を揃え、外部企業との接続に備えた。県都にある量販店の見学では、

事前学習でも算数・国語・社会など親和性のある教科・学習領域も多く、他教科との連携を一步進めることができる。秋、中島港でのワカメの種付けも終え、いよいよコアとなる行事が近づいた。

7. 消費者教育の核(コア)としての校外学習(資料1)

夏休み前から、そごう徳島店と交渉を重ね、全校児童36名と引率9名を加えた45人乗りのバスを入札で配車。当日は販売店の栄枯盛衰を知るために、次のような日程とした。

[見学の概要]

コアとなる校外学習 平成28年1月13日 そごう徳島店	
8:30 学校発 ☆輸送手段の選択と公共交通機関の課題	1～6年生の全児童36名と引率9名の、大型バス45人乗りを4社見積もりで選定し、輸送費を最小限に圧縮。学校の立地を考えると1人あたりの運賃が公共の交通機関の移動とほぼ等価であることを知る。
9:20～ 東新町商店街車窓見学 ☆なぜそうなったか?	そごう徳島店から、ほど近い50年前に栄華を誇った東新町商店街を車窓から見学。事前学習から、シャッターに閉ざされた商店街の栄枯盛衰とそれに至った原因を考える。
9:30～ 徳島駅前地下商店街見学 ☆生き残りの戦略	駅前のデパートと対峙しながらの価格設定、品揃えの特徴、狭い坪数での売れ筋商品の陳列の仕方、県外からの観光客を意識した商品配列、POPに見られる視覚効果の妙などを理解する。また、競合しながらも共通する顧客サービスについても学ぶ。
10:30～ そごう百貨店見学 ☆販売側の責任	百貨店前で集合し、教育係から入店にあたっての注意を受ける。その後、従業員入り口から店内に入場。身分証明のカードを身につけ、店内を移動。前半は、高学年と低学年とに分かれる。
店内および隣接施設見学	1・2・3年生 徳島市立図書館 4・5・6年生 そごう徳島店
その① 10:40 ☆来館者(来店者)目線 ☆利潤と社会貢献	カフェのようなスペースの意味を考えながら、同じ公立の近隣の図書館との違いを比較する。 盲導犬育成の概要と、そごうグループが、利潤追求だけでなく社会貢献を行っていることなどの説明を聞く。
その② 11:00～ 全国うまいもの市(物産展) ☆自分たちとの相似形	決められた面積に置かれた効率的な調理器具や効果的に配置されたレジなど、客の足を止め、販売する各店舗の工夫について学ぶ。店員の声のかけ方、POPの色使い、行列の誘導方法など自分たちの店舗配置に一番近い販売環境について深く理解する。
その③ 11:30～ 社員食堂での昼食 ☆普段足を踏み入れることのない場所での経験と利用の有利さ	料理長自らが提案した山口小学校オリジナルランチを、社員やパートさんに混じり全員で食べる。華やかなデパートの裏側を支える仕事や廉価であっても栄養面で熟慮された食事の素晴らしさなどを知る。セルフサービスの片付けやカード決済の便利さと社員食堂の有利さについて理解する。
その④ 14:00～ 2階のからくり時計前での盲導犬の体験学習 ☆1頭を育てる価値	盲導犬協会から招いた講師による参加体験型学習。目の不自由な方が盲導犬といっしょに暮らすための社会について学び、疑似体験を行う。1頭の盲導犬を育てるのにも数百万円のお金が必要であることや価値についても知り、募金を行う。
その⑤ 14:30～ 大規模店舗の防災 ☆事故防止の責任	大型量販店での火災発生時の備えについて、施設面の工夫や避難誘導の仕組みについて話を聞く。南海地震などの大規模災害の時の動きについて、緊張感を持って理解する。
16:00 学校帰着	自分の考えを持って見学についての考察を行う。

子どもたちにとって物産展の賑わい^{にぎ}や仮設店舗を想定しながら見学し、社員食堂で山口小学校オリジナルの特製ランチを社員やパート・出向社員の皆さんに混じって食べる時間は格別であったようだ。後日、高学年では社員食堂で食事をすることによってどんな長所があるかについて自然と話が発展した。外食に比べて廉価であること、栄養管理や会社の秘密が守られ情報交換ができること、時間の有効活用等多くの長所が見つかった。

8. コア学習のAFTER（販売本番）・・・機会ととらえ、それに正対する行動

年が変わり、子どもたちは漁業者からワカメの生長について情報提供を受けながら、実際の販売の準備を始めた。

(1) 4店舗同時展開の野望・・・主体的に、より責任を持ってやり遂げるために。

昨年度の反省で、車という交通手段を持たないお年寄りへの配慮から、空白地帯であった旧道沿いに1店舗を増設し、商圈を囲むように4店舗を配置することが提案された。

店名	前年度の反省	販売戦略と工夫
山口小学校本店 前年度販売実績 第3位	開店前よりお年寄りが列を作り、開店準備が整わないうちに殺到して混乱が生まれた。	壁面に値段表や手作りのポスターを貼り、来店客が並ぶ位置にコーンを設置した。余裕を持って店舗陳列を行う。
山口ストア前 前年度販売実績 第1位	スーパーの入り口という立地とはいえ、買ってもらうためにはアピールが必要だったが、お客を取りこぼした。	店舗を入り口付近に寄せ、スーパーの来客にしっかりと声をかけて、ワカメがどんなに美味しいかを伝える担当者を増員した。
桑野公民館前 前年度販売実績 第2位	多くの来店客があったピーク時には、対応が間に合っていなかった。売り切れた商品をずっと探す人に振り回され最後まで翻弄された。	前年度以上の初期在庫を確保して店舗を幅広く設置し、対面販売の要員を増やした。寒さへの配慮で、途中から奥に入るように促されても、売り切れと誤解されるので、外での販売を継続する。
山口保育所前 増設店舗	旧道沿いで、高齢者の方々の徒歩による来店ニーズに応えられなかった。	売り上げの大幅なアップは望めないが、高齢者が徒歩で買い物に来やすい環境を整備する。

(2) 攻めの販売への布石

前年度以上の来客を促し売り上げを確保するために、隣接市町村までチラシ配布のエリアを広げた。チラシの選定は、収穫風景と地図を共通にしたプレートで全学年の公開審査とした。もちろん、集計もカー・オブ・ザ・イヤー方式である。その選考では、高学年に混じって1年生の作品も選出された。店舗は異学年の色別班による分担制で同じ掲示材料だけを配布し、子どもたちの裁量で販売グッズを自作させた。店舗の配置場所は抽選とし、売り上げに一喜一憂せず立地の違いを生かして最大限の努力をすることを申し合わせた。

販売前日には、中島港で水揚げした700kgを越えるワカメを全員が養殖ロープから切り分け、長時間の作業で袋詰めした。当日は、3時間ほどでおおよそ2,000袋を完売することができ、その模様は多くのメディアに取り上げられることになった(資料2、3)。

9. 総括とまとめ

地方では、人口減少に伴う消滅集落の危機が間近に迫り、地域創生の役割も学校に担わされようとしている。山口小学校で2年目となるワカメの養殖と販売は、そごう徳島店の全面協力が得られた体験により、実際の販売にも大きく生かされた。百貨店の見学という行事の後で、販売が加わることで意識がさらに高まり、地域からの賞賛の声は、子どもたちの自信へと昇華した。支出を巡っての根拠のある話合いは、将来のよりよい主権者となる種蒔きとなったことであろう。

仮説の「健全な主権者となり得る社会的な知識や思考力・判断力・表現力などの公民的資質は自分たちが販売の当事者となった主体的な経験でのみ育つのではないか。」では、この先行研究が、紙媒体や座学で行う金銭教育の終焉を告げるものとなったかもしれない。20万円を超える売り上げを前にして、子どものひとりがつぶやいた。「先生、何にもあきらめんでもええやなあ(あきらめなくてもいいんだね)。」これが、子どもたちの実感ではなかったか。さすがにブランコは買えなかったが、行事を前提とした金銭教育は、他教科の学習内容をも巻き込み、担任にも児童にも軽い高揚感を与え、学びの構えを育てることにつながった。今後、学習指導要領の改訂を睨んで、他教科との棲み分けの金銭教育を、どのどんな時間に位置づけるかという課題へのひとつの提案になれたのではなからうか。

この金銭教育を母体とした歩みは、山口小学校を徳島県で唯一の「平成27年度観光ユニバーサル大賞」²⁾受賞校にした。日頃の学習でも中心部から離れた故郷をどうすれば発展させられるかという命題に、都市部からの距離感や土地の入手のし易さ、駐車スペースの余裕などを逆手にとって「家族で来てもらえる動物園の建設」と笑顔で答える児童も育っていることはうれしい限りである。

この研究は、その独自性から想像もしない動きにつながった。東京一極集中の是正と地方創生のうねりで消費者庁の徳

島県への移転が議論される中、なんと消費者庁の板東長官が、山口小学校へ視察に来られることになり、静かな山里のほのぼのとしたニュースとなった。山口小学校の金銭教育(消費者教育)は高く評価され、県民の悲願である消費者庁移転にという期待が膨らんだ。判断は先延ばしとなったが、この先行研究が国レベルで高く評価され、移転材料の小さな要素のひとつになれたとしたら、うれしいことである。

金銭教育……。お金は、子どもを真剣にするアイテム。そして、子どもを主体的にするアイテム。子どもの夢を^{かな}叶えるアイテム。子どもたちと共に3年後の消費者庁移転の朗報を楽しみに待ちたい。金銭教育(消費者教育)の限りない可能性を信じて。

注1) 金融広報中央委員会「次期学習指導要領改訂に向けた要望書」 2015年9月4日

URL <http://www.shiruporuto.jp/education/about/container/oshirase/pdf/oshirase054.pdf>

注2) 徳島県が、県内在住の個人、県内の団体、事業所、学校を対象に、外国人を含む県外からの観光客に対してユニバーサルデザインによる配慮がなされたものを表彰している。金銭を扱う学習において行った、外国から来られた遍路の方の役に立つ道しるべを設置した内容が活動部門で表彰された。

<参考文献>

・金融広報中央委員会『金融広報プログラム[全面改訂版]—社会の中で生きる力を育む授業とは—』 2016年2月

URL <http://www.shiruporuto.jp/education/about/container/program/>

・文部科学省「小学校学習指導要領」平成20年3月告示 平成27年3月一部改正

・文部科学省「『主権者教育の推進に関する検討チーム』最終まとめの策定について(通知)」平成28年6月20日

資料1 学習風景



水環境を調べる4年生



中島港で種付けをする



各学年への質問袋の様子



質問の答えを入れる袋



投入された質問用紙



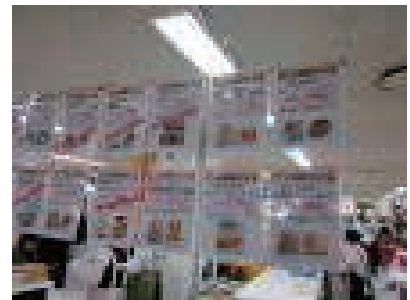
徳島駅の地下商店街見学



見学の百貨店入り口



社員食堂のコーナーでそのよさに気づく瞬間



ワカメの販売時に参考となる物産展の掲示風景



社員食堂で食事する児童……専用カードでの決済やセルフサービスの仕組みに、新鮮な驚きを感じる



物産展の案内ポスター……こうした表示を目にすることで店舗のイメージをつかむ



百貨店の2階出口付近で盲導犬協会の人の話を聞き、盲導犬の大切さを知る



ワカメ販売山口小学校本店……袋のラベルも誇らしげに



表示と陳列を整えた桑野公民館前の店舗の色別班



開店と同時に押し寄せる客の波をさばく子どもたち



バス停の壊れたベンチを病院に行く高齢者のために何とかしたい



ワカメの販売益で買ったアルミベンチ……バス待ちの高齢者の人が安心して座って待つことができる。4年生の小さな社会貢献



ベンチでくつろぐ地域の方々



総合的な学習で四国遍路のことを学習している6年生は、杖を作るために山に入って雑木の切り出しを行う。担任による説明風景



雑木を乾燥させてできあがった杖の前での6年生。逆打ちの年の記念事業になる



6年生は、ワカメの販売益で遍路の杖を入れるための傘立てを2個購入した。表示には、防水加工された子どもたちの温かいメッセージが添えられている。お金が使えるということは発想も膨らむ



地域を花でいっぱいにしたかった1年生。花の種は全校児童にそれぞれ2袋ずつ配布できて笑顔いっぱい



伝統の灯は消さない……売上金で前年度に続き、車いすを寄贈する



運動会であげる校章旗を買った5年生……自分たちが父や母になっても記憶に残るシンボルになる



徳島県庁で行われた総合教育会議で発表する5年生になった子どもたち



県庁で実践発表する5年生

資料2 地域の新聞販売店のミニコミ誌の表紙



資料3 新聞記事

徳島新聞 平成28年2月17日付

種付けたワカメ収穫

阿南・山口小児童 きょう地元で販売



漁協組合員と一緒にワカメを引き揚げる児童ら「阿南市の出島海岸沖」

阿南市山口町の山口小学校の全校児童36人が16日、同市那賀川の出島海岸沖に自分たちが種付けたワカメの収穫、袋詰めなどを体験した。17日に同校などで一般販売する。代表の3年生と4年生が1人ずつ、阿南中央漁協の組合員らと共に船に乗り込み、海中から養殖ロープを引き揚げた。昨年11月に全校児童が種付けたワカメは、1袋ほどに育った。販売するものがあり、約700分がトラックで学校に運び込まれた。同校では全校児童がはさみを使って、ロープからワカメを切断。葉、莖、芽カブに選別した後、300円ずつ袋詰めし、約2200袋分を用意した。引き揚げ作業を体験した4年の仁木悠貴君は「ワカメはとてりも重かったけど、面白かった。販売するの楽しみ」と話した。ワカメは児童が持ち帰ったほか、17日午前8時40分から、山口小、山口保育所、桑野公民館、山口ストアの前の4カ所で、1袋100円で販売する。山口小は2014年度から総合学習の一環として、ワカメの収穫、販売に取り組んでいる。

(杉本宏文)

読売新聞 平成28年3月31日付

卒業生 手製つえ設置

阿南・山口小 札所休憩所に



「つえとつえを入れるか」を設置する児童ら（阿南市で）

阿南市立山口小を卒業したばかりの児童たちが30日、四国霊場二千一番札所・大龍寺（阿南市加茂町）と二千二番札所・平等寺（同市新野町）の間にある休憩所（同市阿瀬比町）に、つえとつえを入れる鉄製の「かご」を設置した。つえは昨年12月に同校近くの山林から切り出した雑木で、児童らが加工。かごは、授業の一環で養殖ワカメを販売した際の売上金の一部で購入した。休憩所の前であった設置式では、児童5人がつえ24本と、日本語と英語、中国語、韓国語で「ご自由にお使いください」と書いた黒色のかごを、住民の代表者らに寄贈。児童らがかごを木造の小屋の柱に針金で固定し、つえを入れた。同市桑野町の田中浩人君（12）は「お遍路さんが疲れた時、気軽につえを持って歩いてほしい」と話し、住民代表の村部陽一・桑野公民館長は「子どもたちのおもてなしの心が伝わってきます」と顔をほころばせた。

徳島新聞 平成28年8月4日付

消費者教育を議題に意見交換
 県総合教育会議
 徳島県総合教育会議の本年度初会合が3日、県庁で開かれた。飯塚嘉門知事と美馬持仁教育長、県教育委員5人が出席し、徳島教育大綱の重点項目に位置づけられている消費者教育をテーマに意見を交わした。

消費者教育に積極的
 に取り組み阿南市の山

口小学校と阿南第二中学校、徳島市の徳島商業高校の児童・生徒9人が授業や部活での活動を報告した。

山口小児童はワカメの種付けや収穫、販売を体験し、収益でバス停のベンチなどを購入した体験に「生産者の苦勞や販売の工夫が分かり、苦勞して手に入れたお金を無駄遣いしたくないと思つた」と感想を述べた。

教育委員からは「3



県総合教育会議で消費者教育の取り組みを報告する児童ら＝県庁

校の活動を他校にも広げる必要がある」「お金の稼ぎ方を教える金融教育も重要だ」といった意見が出た。

知事は消費者庁誘致に向けた取り組みと絡め、「徳島の事例は全国の消費者教育のモデルになり得る」と述べた。

(佐藤亮)

徳島新聞 平成28年4月3日付



バス停にベンチを設置する児童
 阿南市山口町

山口小児童
**収穫したワカメ売り購入
 バス停にベンチ設置**

阿南市山口町の山口が、山口中バス停の上アルミ製ベンチを買い換えた。3年生3人は市社協を訪れ、車両に車いすを手渡した。

同校3、4年生は総合学習の授業で、養殖ワカメの種の種付け体験し、育った後に収穫した。2月に桑野公民館前ならい力所で販売したところ、約20万円の売り上げがあった。

3年生3人は市社協を訪れ、車両に車いすを手渡した。

同校3、4年生は総合学習の授業で、養殖ワカメの種の種付け体験し、育った後に収穫した。2月に桑野公民館前ならい力所で販売したところ、約20万円の売り上げがあった。

(三浦麻衣)

徳島新聞 平成28年7月28日付

「新たな可能性感じた」

試験振り返り 緊急時の対応課題



記者会見で試験業務を振り返る板東長官
 県庁

徳島県庁で大規模な試験業務をしている消費者庁の板東久美子長官は27日、試験業務期間中で最後となる定例記者会見を県庁で開いた。4日に始まった試験業務を振り返り、徳島の消費者教育などの取り組みを評価した一方、消費者庁の機能面での緊急時の対応や関係機関との連絡調整といった点を課題に挙げた。試験業務は29日までだが、板東長官は「この日で試験勤務を終え、帰京した。会見はテレビ会議システムで東京・福が関の消費者庁と結んで行った。長官は期間中、課長が急きょ帰京したり、在京の職員が代わって対応せざるを得なかったりしたケースを挙げて、「迅速な対応や関係者との調整が重要な業務では難しさを感じた」と述べた。

関係省庁や団体との連携については、共通のネットワークシステムがない現状では「消費者庁だけの努力では難しい」との認識を示した。

一方で、県内各地を視察したことに触れ「消費者教育などに熱心な取り組みが見られた。行政や事業者、学術機関から継続的な協力が得られれば新たな施策を創出できる可能性も強く感じた」と評価。今後は「できる限り早く結果を整理し、最終的な決定につなげていけるよう迅速に対応したい」とした。

会見に先立ち、長官は飯塚嘉門知事と面会し、県のサポートに謝意を述べた。面会後、知事は報道陣に対し「(移転は)最終的には政府が決めることだが、福が関の在り方を変える大きなターニングポイント。今後も県一致であらゆる方面に働き掛けていく」と実現に意欲を示した。

(笠井秀彰)

(新聞記事は、各新聞社の許諾を得て転載しています)